

称号及び氏名 博士(看護学) 吉田 美幸

学位授与の日付 平成29年3月31日

論文名 「点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能の発揮」に向けた看護師へのプログラムの検討とその適用による看護師の実践

論文審査委員 主査 檜木野 裕美

副査 上野 昌江

副査 中山 美由紀

副査 町浦 美智子

## 論文内容の要旨

### 【目的】

点滴・採血を受ける幼児後期の子ども（以後、「子ども」とする）の自己調整機能は看護師の支援のあり様により変化するが、その支援の内実は明らかにされていない。本研究の目的は、点滴・採血を受ける子どもの自己調整機能の発揮に向けた看護師へのプログラムの検討とその適用による看護師の実践を明らかにすることである。

### 【研究方法】

#### 1. プログラムの作成

文献検討、概念分析及び予備研究を基に看護師に提示するプログラムとして、プログラムケア内容と自己調整機能を発揮している子どもの姿、学習教材を作成した。

#### 2. プログラムの実践

1) 研究デザイン：プログラム適用前後の看護師の実践を経時的・縦断的に調査し質的に記述する時系列デザイン。

2) 研究参加者：小児看護経験3年以上の看護師。

3) データ収集方法：点滴・採血を受ける3歳半から就学前の子どもへの看護師の関わりへの参加観察と半構成的面接、保護者に対する子どもの日常の自己制御機能の調査を、プログラム前、プログラム説明後2回（以後、「1回目」「2回目」とする）の計3回実施した。面接内容は、自己調整機能を発揮している子どもの様子の観察、子どもへの関わりの意図、必要性の認識と、参加観察で捉えた看護師の関わりの意図とした。

4) 分析方法：看護師と子どもの属性は、記述統計を行った。面接内容は逐語録にし、コード化し、カテゴリーを生成した上で、①自己調整機能発揮に向けた関わりへの「必要性の認識」（以後、「必要性の認識」）、②子どもの自己調整機能への「観察能力」（以後、

「観察能力」)、③自己調整機能発揮に向けた関わりへの目的的实践(以後、「目的的实践」)、に分類後、プログラム前、1回目、2回目の実施時期ごとに全参加者のカテゴリーを統合し、実施時期による変化を明らかにした。さらに、「必要性の認識」「観察能力」「目的的实践」を統合し看護師の实践の姿を明らかにした。子どもの日常生活における自己制御機能得点はKruskal-Wallis検定を行った。

**倫理的配慮**は、大阪府立大学看護学研究科研究倫理委員会(承認番号25-26)および研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た。

## 【結果】

### 1. プログラムの作成

- 1) 看護師に提示するプログラムケア内容は、ケア項目22項目、自己調整機能を発揮している子どもの姿44項目とした。
- 2) 看護師の实践学習のために提供する学習教材は、携帯用リマインダー、子どもへの説明用絵本を作成した。
- 3) 看護師へのプログラム説明方法として、スライドを作成した。

### 2. プログラムの实践

- 1) 研究参加者の概要:3回のデータを得た9名を分析対象とした。平均年齢 $39.8 \pm 9.5$ 歳、平均小児看護経験年数 $5.9 \pm 2.4$ 年であった。看護師が関わったプログラム前、1回目、2回目の子どもの日常の自己制御機能得点に有意な差は認められなかった。
- 2) プログラム前後の看護師の实践
  - (1) 必要性の認識では、プログラム前に[今ある自分の枠を規準にした子どもやケアへの理解と判断]が見られたが、1・2回目には[子どもの調整能力に着目し、实践を通して意味づけられたケアの見出し][子どもの調整能力に意味づけた实践へと向かってゆくケア志向]が語られた。また、全ての時期で[子どもの調整能力を支えるケア志向の揺らぎ]が見られた。
  - (2) 観察能力では、プログラム前には子どもの示した見えやすい言動からの[今ある自分の枠を規準にした子どもの「嫌」「恐れ」「頑張り」への限定的な捉え]をしていたが、1・2回目には、[状況や相互交流のなかで「嫌だ」という気持ちを調整し頑張ろうとしている子どもの姿の見出し][状況や相互交流のなかで「嫌だ」という気持ちを多様に調整しながら頑張ろうとする「この子」らしさを読み解く力の深まり]がみられるようになった。また、全ての時期で[「嫌だ」という気持ちを調整している子どもの姿への捉えの不確かさ]もみられた。
  - (3) 目的的实践では、プログラム前には、自分に可能な説明や子どもへの一方的な対応といった[今ある自分の枠を規準にした子どもへのケア]をしていたが、1・2回目には看護師から子どもへの「歩み寄り」により「対話的關係づくり」をする[子どもの調整能力に着目した实践への踏み出し]が生じ、頑張る「この子」と協働し[子どもの調整能力に着目した实践を探求し「この子」とともに創りあげてゆくケア]という意図的な

実践がみられるようになった。また、全ての時期で〔状況に左右された子どもの調整能力を支えるケアへの揺らぎ〕も見られた。そして、プログラム実施に伴い、実践への無自覚さへの省察から子どもの立場からケア視点を拡張した自省への変化、処置を受け入れてもらえた感触から「この子」と共に臨めた充実感へと変化していた。さらに、新たな「この子」を発見し〔ともに処置に向かうパートナーとしての「この子」との出会い〕をしていた。

### 3) 看護師の実践の姿

看護師の実践の姿として、「今ある自分の枠を基準にした実践」、「子どもの調整能力支援に着目し踏み出す実践」、「この子」とともに調整能力支援を読み解き探求し創りあげていく実践」、「子どもの調整能力支援への不確かで揺らぐ実践」「この子」とともにいる「いま」の深まり」の5つの姿が明らかになった。

#### 【考察】

開発したプログラムにより、子どもの自己調整機能発揮に向けた支援に対する看護師の必要性の認識、観察能力、目的的实践は、「不確かで揺らぐ実践」を伴いながらも、「今ある自分の枠を基準にした実践」から、「子どもの調整能力支援に着目し踏み出す実践」、「この子」とともに調整能力支援を読み解き探求し創りあげていく実践」へと深まっていた。それは、看護師が、プログラムを指標として実践を重ねるとともに、自己の実践に自覚的になり子どもの立場から省察することにより可能になったことが考えられた。また、看護師は、子どもの頑張りを支えられたと感じ取れ、さらには、処置に向かうパートナーとしての「この子」に気づき、子どもとともにいる「いま」を充実させるケアを志向する「この子」とともにいる「いま」の深まり」により、支援が深まっていくことが推察された。

そして、子どもの調整能力支援に着目した意図的能動的な実践へと必要性の認識、観察能力、目的的实践を深めていくためには、子どもの示した見えやすい言動から「嫌」「恐れ」「頑張り」を捉えて二項対立的な見方をしたり、子どもへの一方的対応につながる「忙しさ」から自己を意識的に一旦離す努力が看護師には必要である。また、プログラムを指標として看護師に提示しながらも、看護師が自己の実践に自覚的になれるよう省察の機会を設けると同時に、看護師の実践への揺らぎを受けとめ、実践を重ねていけるよう看護師を支援する必要性もまた示唆された。

キーワード：幼児後期の子ども、自己調整機能、点滴・採血、看護師、支援プログラム

Key Words: preschool children, self-regulation, venipuncture, nurse, support program

## 学位論文審査結果の要旨

幼児後期の子どもは、話ことばを駆使して自分の思いを伝え、自我が太り自己の欲求を訴えるようになる一方、ことばで思考し、自己の行為を調整し始める。「..したかったけど、我慢して..したらできた」という二つの相反する気持ちを一つにまとめ、欲求と自制を繰り返し、自立から自律に向かう。この自制する心は我慢ではなく、相手の気持ちを考えながら自分を制するというものであり、自己調整能力を発達させていく。苦痛を伴う出来事や状況下での子ども自身の調整レベルは、日常生活上の出来事への調整とは異なると言われる。本来、受け入れ難いはずの苦痛を伴う検査や処置を子ども自身が受け入れ、主体的に参加できるためには、看護者の関わりが必要である。しかし、我が国の小児看護学教育で用いる教材では、幼児後期に芽ばえる自己調整機能という発達の内実を捉えていない。本研究の目的は、点滴・採血を受ける子どもの自己調整機能の発揮に向けた看護師へのプログラムの検討と、その適用による看護師の実践を明らかにすることである。研究方法は、文献検討、概念分析及び予備研究を基にプログラムを作成すること、プログラム適用前後の看護師の実践を経時的・縦的に調査し質的に記述することである。作成したプログラムは、22のケア項目、自己調整機能を発揮している子どもの姿44項目で、看護師の実践学習のために提供する学習教材として携帯用リマインダー、子どもへの説明用絵本を作成している。看護師の実践を、プログラム前後の必要性の認識、観察能力、目的実践の視点から質的に分析し5つの姿を明らかにした。看護師が、プログラムを指標として実践を重ね、自己の実践に自覚的になり子どもの立場から省察することにより支援が深まっていくことが推察され、看護師の実践への揺らぎを受けとめ、実践を重ねていけるよう看護師を支援する必要性も示唆された。

本研究は、幼児後期の子どもの発達の主軸となる自己調整機能に着目したものであり、点滴・採血のみならず子どもの関わり全般に活用できる。作成したプログラムの実践を質的分析で示しているが、その結果を簡潔に且つわかりやすく提示できていない課題があるが、小児看護学の命題である子どもの発達の内実に添ったケアを提示した研究であり、小児看護学の発展に寄与すると評価できる。

以上のことから、本研究は博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと判断した。